なれば、いらいらしないですむ、すめば子どもにあたらず、平温無事にその場は終る。

いわゆる便利な子どもである方が好ましいと。とくにいうことを聞かない子どもになってもよいなどとは、さらに考えてはいないが、母親に、おとなに便利な、自発性のない、個性のない子どもでなく、やはりどんな場合でも、自分の意見を持ち、発言できる子どもであってほしいと望むのです。それでは必死の思いで働いて、そんなことを考える余裕などもてない母親との間に、たってどんな考えをもったらよいのかと。また五歳児となりますと、地域によって違いますが、学校にあがるための準備教育機関と考えてなんでも教えてくれるよう、要求し、また保育園にくれば、自分が教えられない点を教えてもらって、学校にあがるにもいいから、という考えで、保育園をみ、保母をみている傾向があります。

学校側と相談して、その旨を母親に話しますが、誰しも、自分の子どもが少しでもよくできて、ほしい、と望むのは同じでしょうし、働く母親は、昼間見られないからと、なお一そう心配することも考えあわせて、自分たちのみられない点を、生活に必要な、基本的習慣、身体の清潔、愛情の欠乏におかないで、勉強のことのみにおいている母親たちとどんな方法で協力していけばよいのか。

二つの同じような例をあげましたが、他にもいろいろな面で、母親の要求点と私どもの理想との間にマッチしない点が起った場合、子どものことはよく考えられても、子どもにつながる母親にはこちらの理想に基づいた要求ばかりで働く母親側の要求を聞くことを忘れがちではないかしらと思います。こういう点については、どんな考えかたをもって、母親と力を合せて、子どもを保育すればいいのだろうか、私ども一人一人の保母が。

（保育園保母・東京）

私の園における問題点

斎藤勝子

就職してから早くも半年、学校時代に教わった理論もそっちのけで、戦場のごとき保育。その中で困っていること。解決しなければならないこと、職場にでて学校時代に教わった理論と、実際の場におけるギャップなど、問題点をあげてみたいと思います。

第一は、子どもの人数が多いということです。私の園では三歳児はいず、四―五歳児だけ。四歳児が少なく五歳児が多いので、四歳児ひと組、五歳児ふた組、保母は新卒のものばかり四人、保母の人数で子どもの人数を割れば、最低規準でちょうどよいのですがそうはいかず、四歳児に二人取られ、今年卒業したばかりというのに、五歳児を三十八人うけもっています。人数を聞いただけで、できるかしらという自信のなさの不安が強かったのですが、やればできないことはないという自己のかいかぶりで、どうにかここまできました。

ここは、公立の保育園と比較して、だいぶ特殊な条件におかれています。場所は会社の寮の中にあり、建物は新設で、公立などは狭くて困っているのですから、広いということは幸せなことかもしれませんが、なにしろ三十六坪の部屋を、真中にし切りがしてあるだけなので、隣りの先生の声がつつぬけというありさまです。明るさ

も、明るすぎて、子どもたちも落ちつけず、たいへん不安定な状態です。そこでまず、少しでも暗くしおちつかせるために、布地を買ってきてカーテンを作り、取りつけました。それでもまだ明るいくらいです。保育室の前が通路のためいろいろの人が通ります。カーテンは保育室を見えないよう防止するのと、両方の意味あいでつけたのですが、布地が軽いため風が吹けば端によってしまいます。部屋を狭くし、どうしたら不安定でなくすことができるか、これは私たちの考えなければならない大きな問題です。

第三としてやはり大きな問題は、現実の子どもの姿です。園にきている九〇％は寮生活者です。子どもたちは寮という一つの地域集団に属し、寮の中の限られた人とはつねに接しているのですが、寮外の人とは接することもなく、寮外の子ども（保育園にきている外の子ども）とは、遊ぶことができないわけではないのですが、ほとんど遊ばず、寮の子どもは孤立し団結しています。寮外の生活を知りません。このことは大きなかたよりをつくっています。父親は工員ですので夜勤があります。その場合子どもが家の中ないしは、廊下で遊んでいたのではうるさくて休めないので、必要上おってできたのがこの保育園なのです。寮は木造建築のため、二階で騒げば下に聞え、隣りの家でラジオをかければ聞えてくるという状態です。このような環境の中で、しかも、おとなたちには邪魔者にされ、教育に関心のうすい親たちに育てられた子どもはどのように成長するでしょうか。この悪条件の中で、いくらかなりとも良くするには、どのようにしたらよいか、今後残された大きな問題です。

では、このような職場について学校における理論と実際を、どのようにいかすか。子どものおちつきのないのは、部屋のためばかりでなく、技術の問題が多分にあります。学校において教わった理論は片隅において、一日が終り、反省のとき、はじめてそうであってはならない、ああであってもならない、こうでなくてはなどと思い出します。毎日毎週毎月、反省がなされても進歩はないようです。

はじめてうけもった子どもたちを、来春は卒業させ小学校に送らなければなりません。自分の姿が、そのまま子どもの姿になり、自分の目の前にさらけだされるのがたいへんこわいと思います。

幼児は心身ともに成長する。先生は心身ともに日々疲労を感じる。この間のギャップをいかにして埋めるか、子どもとともにつねに若く、そして健康であり、マンネリズムにおちいらない保育がしたいと思います。

（保育所保母・川崎）

「共稼ぎ雑感」

玉木直子

保母になって早くも五年、その間に、他人はいろいろなことを言う。「尊い仕事ね」「子供と遊んでいられて楽しいでしょう」「結婚して役立つわね」「たいへんね。家庭に入ったら止めるのね」等々。まったくさまざまである。保母と家庭、本当に両立しないものだろうか。否、恋愛すら、時間がなくてできないと、現場から声が出る。女性の社会的進出、地位の向上を願いつつ、その子どもたちの福祉にあたる保母が――結婚したらやめる。あるいは、あきらめきって、干からびて行く――保母も女であり、人間なのだ。この矛盾